

第1回瀬戸市基本構想審議会での発言内容（2040年を見据えたまちづくりにおけるキーワード） 【論点1】

市民の誇り

- 外からの視点を持つまでは地元の良さに気づけないこともある。外から関わってもらう人との間にどのような関係が構築できるか。(吉澤委員)
- 外に出ていった人が少しずつ里帰り等の機会に帰ってきて、愛着を持ったり、誇りを持ったりできるようになるように、色々と見る機会があると良い。(石川会長)
- 愛知県が成長している中において、今回の市民意識調査では「これから衰退しそう」が多く集まっているというのはどうにかしなければならぬ。(伊藤委員)
- 瀬戸市はインディーズバンドのようなもの。とても良い音楽、声なのに、意外にもみんなが気づいていない側面がある。地域の魅力を再発見・再構築していき、対外的に発信していけるようにすることが方向付けられると良い。(野々垣委員)
- 外からの視点として、まちが失ってはいけないことについて話をすると、子どもの意識も変わってくる。その地域が持つ価値について伝えていく教育も大事。(堀部委員)

<瀬戸のポテンシャル>

- 起業家として活躍する出身者が多いこと(伊藤委員)
- 文化・芸術・クリエイターをはぐくむまち(伊藤委員)
- 女子サッカー(梅村委員)

ダイバーシティ、担い手確保

- ダイバーシティ経営を取り入れている。色々なチャレンジ・挑戦をする場を与えていく過程で、企業が成長するという可能性に着目。(橋本委員)
- 「女性が働きやすいというのはみんなにとっても働きやすいということになる」というのは当社において言い続けている。(橋本委員)
- 瀬戸市は在日コリアンの方や、豊田市の工場に勤める外国人労働者も多く住む地域。単身で短期間働きに来ている方、10年以上瀬戸市におり、定住している方など、様々な居住形態の方が入り混じる中で課題も変わってきている。(神田委員)
- 企業活動を続けていくためには採用活動が重要。企業の立場としても選ばれるまちになる必要がある。(梅村委員)
- 人々が都心の生活を望む方向に行くのは自然なこと。都心とは違った魅力を考えていかなければいけない。(梅村委員)
- 最近は、社会や地球に対して良い動きをしている企業に入りたいと考える学生も多い。企業、自治体のPRをこうした学生につなげることも方針の一つになりうる。(鷺見委員)
- 企業への地域をあげてのPR・誘致活動は、熱心な自治体に劣後していると感じる。(梅村委員)
- 探求学習などを通して、先生以外にも、地域の核となる人材を育てて、学校の授業に差し込んでいくというような取組も考えられるのではないかと。(堀部委員)
- 瀬戸市の子ども・若者会議では、熱心に議論を交わす子どもの姿があった。構想にも子どもの意識が大切にされると良い。(林委員)

関係人口・共創人口

- 市外で活躍する人に対して、瀬戸市内においてどのように活躍してもらえるようにするのかを考える。(鷺見委員)
- 関係人口として関わる人とのつながりにはグラデーションがある。ふるさと納税のような緩いつながりから、地域の祭り等に来てくれるような強いつながりもある。(吉澤委員)
- 自分たちがどのような地域にしていきたいのか、どのような人に関わって欲しいのかという点について明示することが重要。(吉澤委員)
- 10代のうちに、仕事や生きやすい生活の基盤をつくる選択肢を知っておくことで、地域に残りたい若者も増える。残らなかったとしても、役に立てることがあればいつでも力になると言ってくれるような若者が増えるのではないかと。(神田委員)

デジタル・DX

- テレワークへのニーズも高まっている。こうした人材側の意識を捉えていく必要がある。(石川会長)
- 地域課題解消のためのDXに取り組むには、目的意識を持った実施が必要。(浦田委員)

起業・スタートアップ

- スタートアップの推進は、女性、外国人、障がい者の雇用に対しても好影響を与えうる。(鷺見委員)

官民連携、自治体経営

- 市役所として、副業等の考え方をどう取り入れるか、働き方に関する変革が必要。官民連携、市役所の活躍をどうするか。(鷺見委員)
- EBPMの推進、国施策との連携を迫る。(伊藤委員)
- 人材、予算等のリソースが減っている中、多様化する住民ニーズに対応することは困難。(伊藤委員)
- 企業も含めた地域の資源を使いながら、共に何かを面白がりながら作っていくことが必要なのではないかと。(吉澤委員)
- 今後の自治体経営を考える上で、リスクマネジメントの視点、超長期を見据える視点、情報が人々の認知空間にどのような影響を及ぼすかを考える視点が重要。(水谷委員)